

# Hijos del Nilo

タイトル ナイルの息子たち Hijos del Nilo

著者 シャビエル・アルデコア Xavier Aldekoa

出版社 グループ・シシヤントス Grup 62

出版年 2017年

ページ数 312頁

読者対象 一般。アフリカや中東、国際情勢やジャーナリズムに興味がある人。

レポート作成 吉田恵

## 概要

ナイルはただの川ではない。このアフリカ最大の川は、何百もの民族の心であり、地上最大の権力を誇った歴代ファラオたちの盛衰の目撃者である。ナイルという名前は、ピラミッドに隠された秘密を思い起こさせ、今日もなお生き残りをかけて戦う、長い歴史に支えられた諸文明の誇りでもある。今日、ナイルはウガンダ北部では平和を、南スーダンでは戦争を象徴する。エチオピアの谷では生、エジプトやスーダンの牢獄では死を意味する。独裁であり、不平等である一方、進歩、希望であり、自由への欲求である。そして、革命の夢でもある。様々な傷を負いつつも、ナイルは過去の、そして現在のアフリカや地中海の偉大な文化が混ざりあう揺り籠であり続ける。本書は、そこに生きる人々、文化、伝統を発見すべく、何ヶ月もかけてナイルの源流から河口までをたどった、気鋭のジャーナリストによる体験ルポルタージュである。

## 目次

序文：旅に誘う川

ウガンダ

白ナイルの最も賢い少女

シートウォーマー

血の川

象

神の殺人者

街道

口実

南スーダン

誰のものでもない国

扇風機

スッドの鍵

世界は周り続ける

シルクの王は病気である

エチオピア

エチオピアの湖の革命

青ナイル川のスペイン人の謎

解決の値段

皇帝の源流

スーダン

2つの川が交わる都市

ハルツームのギリシア人

砂漠はファラオのものではない

愚かな男

エジプト

ヌビアのベッド

ファラオのピグミー

ファルーカ（小型艇）

鉄道

祈祷時報係の呼びかけ

謝辞

内容

ナイル川は、白ナイルと青ナイルが途中で1つとなり地中海に注いでいる。著者は、白ナイル源流があるウガンダから出発して、紛争の只中にある南スーダンを下り、次は青ナイル源流があるエチオピアへ、そして2つのナイルが合流するスーダンを通して、エジプトの河口を目指す。

・ウガンダ編

代で拉致され、戦闘員としてリーダーの右腕にまで登りつめた男性から、壮絶な半生の告白を聞く。国の北部では、南スーダンの争乱から逃れてきた大量の難民に遭遇。難民の惨状を目の当たりにし、陸路で旅を続けるのを断念

、首都カンパラに戻り相棒と別れ、空路で南スーダンへ。

・南スーダン編

年続いた誇り高きシルク王国に属し、信仰と一体となった魔術が息づく歴史あるその地域にも、多くの難民が流入、支援が追いつかない状況である。

・エチオピア編

観光資源に恵まれ、経済発展も著しいエチオピア。表向きは安全を装っているが、実際は独裁政治と監視社会への抗議活動が日々激しくなり、非常事態宣言が発令される状況となっていた。海外からの取材がシャットアウトされる中、著者は自身の兄と一緒に旅行者として入国、タナ湖を北から南へフェリーで渡り、山奥の修道院の裏にある青ナイルの源流へ。スパイの目に怯えながら、人々は声を落として現状を嘆く。経済発展の恩恵を受けているのは一部の特権階級だけで、国民の大半が貧困層である。抑圧や格差の根底に横たわるのは、この国でも民族の対立。エリトリア独立戦争も、結局は冷戦のパワーゲームを背景とした民族抗争だった。それでも人々は、自国の歴史と独自の文化を愛し、魔法や精霊を信じ、エチオピア人であることに誇りを持っている。

・スーダン編

取材ビザの申請が却下された著者は、観光客のふりをしてナイル沿岸のメロエ、クシュ、ヌビアの遺跡とバユダ砂漠を巡るツアーに参加し、その後離脱してエジプト国境を目指す。独裁体制が続き、監視の目が張り巡らされているが、スーダンの人々は親切でもてなしの心を忘れず、嘘や裏切りを嫌っている。首都ハルツームでは、2つのナイルの合流点と考古学博物館を訪問。スーダンの歴史は宗教と利権を巡る戦いの連続だったが、ナイル川は国を超えて文化、信条、民族を結ぶ役割を果たしてきた。一行はナイル川に沿って北部へ向かい、メロエ王国の遺跡群を見学、観光用の豪華なテントに宿泊する。争乱やイスラム過激派のテロにより、エジプトやリビアなどで観光客が減少する中、スーダン政府は自国の安全を謳い、観光客の更なる獲得に乗り出していた。その後訪れたバユダ砂漠では、自然や仲間との調和を大切にしながら暮らす遊牧民と出会う。

・エジプト編

年のアラブの春の革命は人々に希望を与えたものの、結局状況は悪化、人々の失望は激しい。旅の終わりは地中海に面した都市ラシード、著者は遂に軍の基地内にあるナイル河口に辿り着く。

所感・評価

序文で著者が自ら述べているように、本書は単なる紀行文、旅行記ではない。旅はあくまでも手段であり、本書の目的は、ナイル沿岸の文化や歴史的背景を明らかにし、紛争や革命に翻弄されながらも逞しく生きる人々の姿を浮き彫りにすることである。

年、バルセロナ生まれ)は、これまでに記者およびライターとして数々の賞を受賞。そのアフリカに対する知識と取

材力が遺憾なく発揮されているのが本書である。古代王国や諸文明の盛衰、アラブの侵攻、列強の植民地主義と独立運動、冷戦の影と現在の独裁政治...ナイル川が目撃してきたであろう、沿岸の人々の歴史と現実を自分の目で確かめるために、著者は2016年7月から数ヶ月をかけてナイル川を旅する。

事実を報道し、問題をあぶり出すルポルタージュとして優れているのはもちろん、世界最長の川を源流から河口まで踏破するという試みは、旅行記ではないとはいえ、冒険譚としての面白さも十分。著者の兄をはじめ、旅の道連れや窮地を救う助っ人として登場する人々もなかなか魅力的だ。ウガンダ編の「シートウォーマー」（満席になったバスから発車できるシステムのため、偽客として席を温めるだけに雇われる人がおり、うっかり騙される）や、エチオピア編の「解決の値段」（軽いバイク事故の補償交渉、大袈裟にふっかけられてもちゃんと落とし所がある）など、打算的だが極めて現実的なアフリカらしいエピソードには、それを観察して記述する著者の温かい眼差しと茶目っ気が感じられる。人間味溢れる著者の、人を信頼し寄り添う優しさ、自分の不甲斐なさを吐露する素直さ、随所に滲み出るユーモアは、読者を惹きつけてやまないだろう。

文章にはルポルタージュらしい臨場感があり、特に読者を掴む各章の出だしが秀逸。テンポよく読みやすいが、余韻が残る印象的な箇所も多い。翻訳はそんな点に留意したい。

、朝日新聞出版)が唯一のルポルタージュであるが、情報の古さは否めない。そう考えると、本著は日本で出版する意義がありそうだ。アフリカの現状に興味がある人や、海外ルポルタージュ好きの人だけでなく、内容的には是非高校生や大学生に読んでもらいたい。ただし、タイトル『ナイルの息子たち』からはナイル川踏破の旅を想像しにくいので、副題や帯などで内容をアピールする必要があるだろう。また、文中に写真や図版が皆無なのが残念。本著のしおりがナイル沿岸の地図になっており、文中の地名をすぐ確認できるのは大変良いアイデアだと思う。

著者は「我々は皆ナイルの息子である」と述べている。ナイルの息子とは、ナイル沿岸の人々だけを指すわけではない。ナイル川に生まれたアフリカ文化やアラブ文化が地中海文化を生み、今の西欧を作っている。示唆に富む一冊である。

試訳 (P.126の25行目~P.129、スッドの鍵)

匹の哀れな黄色い小鳥が、必死に脱出を試みていた、ナイルでは魚も捕れた。幸運の女神が微笑み、魚が予想以上に捕れた時には、マディトは隣人たちのことを考えた。老人や孤児、未亡人たちに会いに行き、魚をプレゼントした。

その共同体意識、社会的絆の基盤としての団結感は、感動的だった。たとえ、戦争や生存意識がエゴイズムや全面撤退に結びつくとしても、戦いが終われば寛大さが辛うじて社会を支えるのだ。アフリカでも、世界のどこにおいても。たとえわずかでもその寛大さがなかったら、僕はアフリカでほとんど何も出来なかつただろう。小、中学校や高校で話をすることが時々あるが、子供達は私に、紛争や暴動の起きているところ、ある程度危険な場所に足を踏み入れた時、どうやってリスクを減らすのか聞いてくる。キーワードは1つだけだ。時間である。法律がなくとも、警察が来なくても、国が知らないふりをして、コミュニティが守ってくれる。そばにいる人が背中を見張ってくれ、通訳をしてくれ、状況に対応してくれる。だから大切なのは、行く先で信頼のネットワークを作ることなのだ。危険であればあるほど、その必要は高くなる、そして信じられないかもしれないが、完全な孤立無援状態に陥った時、人の寛大さも高まる。アフリカという、あまりにも多くの社会が国のインフラなしで生き延びているところでは、共同体こそ避難所であり救命具なのだ。そこに属する人にとっても、そこに着いたばかりの人にとっても。信頼と結託の強固なネットワークを作る唯一の手段は、人々のために時間を割くことであり、本当に彼らを大事に思っていると伝え、彼らの信頼に値する人間になることなのである。

人の女たちは動こうとしなかった。そこにいるのが安心だった。マジヨクはかなり年寄りで、目も見えず、歩くこともできなかった。胸に赤い花が刺繍されている、擦り切れて汚れたスモッグを着て、地面に座っていた。僕が彼女の手を引き寄せ挨拶すると、僕には理解できない言葉で話し始めた。英語しか喋れないことを詫びようとしたが、意味はなかった。しばらくの間、彼女は弱々しい声で悲しい物語を話し続けた。

アリエクが母親に近づいて微笑んだ。何か語りかけると、老婆は話すのをやめた。彼女は白内障で何も見えない目を地面に落とし、動かなくなった。

アリエクは足を引きずっていた。歩く時は左足を引きずり背中を丸めていたが、テントの裏に植えたわずかな農作物をどうにかして小鳥たちから守ろうと奮闘していた。アシの茎の先に泥団子をつけ、ぶっきらぼうに、トウモロコシをつつく鳥たちめがけてその団子を振り投げた。黒い鳥が2匹、驚いて飛び立った。

僕はアリエクの首に鍵がぶら下がっていることに気づいた。2つの金色の鍵が黒い紐に通され、首にかかっていた。

「もう役に立たないけど」アリエクが言った。

それは火事で焼けた彼女の家の鍵だった。反乱軍が近づいてくる音を聞いた時、逃げる前に玄関を閉め、大事にしまった。鍵はまるで光のように煌いた。もしいつか戻れる日がきたら、と思った。走って逃げていると、遠目に村から煙が上がっているのが見えた。その時、もう二度と家には戻れないことを知った。それでも彼女は鍵を首にかけ続けている。

アリエクが歩くと、鍵はぶつかり合って心地よい音を立てた。

チリンチリン。

チリンチリン。

チリンチリン。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/hijos-del-nilo>